

2006年12月21日

浅井和子著“民間大使ガーナへ行く”を読んで
(文芸社刊)

阿部哲夫

* 2002年から2005年の足かけ3年間、ガーナに大使として赴任したときの見聞をストレートなタッチでまとめた報告書。通例こうした形で派遣されると、奥歯にももの挟まったような表現が多く、読者にフラストレーションを与えることが多いものだが、彼女は本業が弁護士と言うこともあってか、自分の見たまま聞いたままを、自分の言葉で、率直に文章にしている。多くの日本人の表現が、他人に配慮しすぎてか、多分に分かりにくくなりがちな昨今、貴重なレポートと言えよう。彼女が本書の中で主張していることには小生も同意する点が多い。2~3例示してみよう。

* 先ず日本の外務省はアメリカに追随するだけで、日本独自の外交政策を行っていないという点を上げたい。ただ率直に言えば、戦後は外務省だけではなく、日本政府全体が主体性を失ってしまい、アメリカのやるとおりにやっていたら間違いがない、我が身安泰、と言わんばかりの自己保身策を採っているように感じられる。

浅井さんも指摘の通り、国民のみならず、日本以外の多くの国々が日本独自の発言、日本独自の行動を期待しているにもかかわらず、バカの一つ覚えのようにアメリカ追随路線をとり続けている。これは長い目で見て日本のためになっていないのではないだろうか。今話題になっている六ヶ国会議にしても、単にアメリカの北朝鮮たたきのお先棒担ぎ路線を採らず、日本、北朝鮮、アメリカ等の関係者にプラスになる妥協点を探る努力をした方が、遥かに日本にとって望ましい結果が得られるのではないだろうか。

日本は、かつて反米路線に固執したために太平洋戦争に引き釣り込まれてしまった苦い経験がある。しかしこの経験は、アメリカに対して反対することを禁じてしまったわけではない。ことに応じて是々非々の路線を採れと言っているだけである。

戦後すぐには占領軍の言いなりにならざるを得なかった。しかし世界第二位の経済大国になり、海外援助額で一位になった現在、相変わらず米国追随路線を継続していることは、日本国民として看過できることではない。

* 彼女がグローバリズムとして議論しているグローバル化の問題も、アメリカ追従問題と並んで小生も無視できない問題だと思う。

小生もガーナを訪れた際、かつて列強と呼ばれた西欧先進国が、ガーナなどの旧植民地で行った収奪の凄まじさに心底驚愕させられた。ここまで酷いことを人間は行えるのだ、愛を説くキリスト教も、列強間の植民地競争のもとでは無力で、むしろその手先の役割を果たしていたのだ、と思い知らされたのであった。

最近しきりに喧伝されているグローバリゼーションなる経済の在り方は、この忌まわしい植民地主義と同根の思想をベースにしているのではないだろうか。アメリカなど西欧先進国の昨今の経済活動を見聞したり、ガーナを自分で見てみて、つくづくそのように感じている。

グローバリゼーションの説く自由経済が、経済に活力を与える作用を持つことは否定しない。しかしこの考えが弱肉強食の作用を持つこと、富むものはますます富み、貧しき者はますます貧しくなる、と言う作用を持つことも否定できない。1960年代以降、市場経済・自由経済を主張する学派が所謂ケインズ学派を引きずり下ろして経済学の主流を占めた後しばらくは、アメリカ経済は活況を呈した。その余勢を駆って世界の多くの共産主義国が、世界の表舞台から姿を消した。

しかし同時にアメリカでは、国内の経済格差が拡大し、国内の緊張は厳しさを増してきている、と言うのも事実のようである。更にこうした経済自由化に伴う経済格差は海外でも広がり、各国での社会的な緊張の増大は大きな問題になっているようである。こうした事態をベースに反米運動も広がりつつある。

グローバリゼーションのもたらすプラスは、それのもたらすマイナスをカバーして余りあり、とは言えないようである。アメリカで起こりつつあること、日本で起こりつつあることを見ると、どうも“自由”と言うのは完璧なものではない、やはり何らかの自制乃至はケインズが説いたようななにがしかの政府の関与、と言ったものも必要なように思われる。

以上